東京大学
先端科学技術研究センター
30年のあゆみ

東大先端研
Research Center for
Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

先端研開所式（1987 年）

福島智准教授（当時）が全盲ろう者として日本初の博士号を取得（2008 年）

先端学際工学専攻はじめての入学式（1992 年）

３号館南棟「環境エネルギー研究棟」竣工（2011 年）

右から３号館、３号館南棟、４号館が連続するキャンパス計画が実現（2018 年撮影）

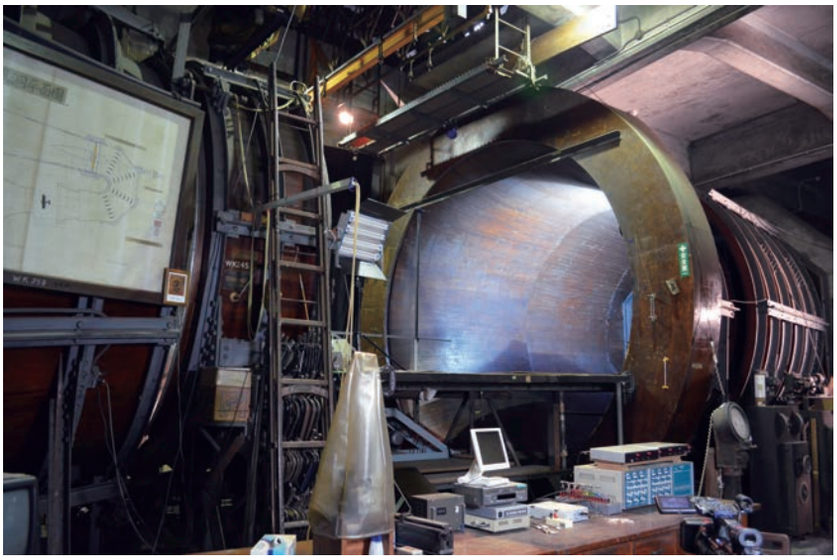
３号館南棟一階 ENEOS ホール（2018 年撮影）

震災復興シンポジウム開催（2011 年）

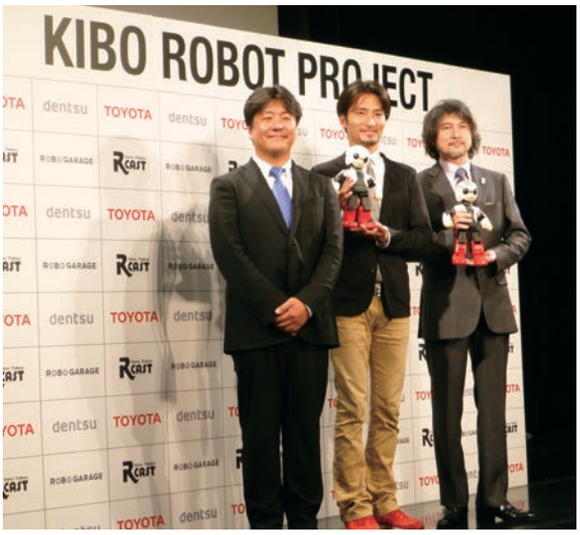
児玉龍彦教授（当時）は、2011 年、福島原発事故後の対応や除染作業によって英科学誌『ネイチャー』の今年の 10 人に選ばれた

先端研 20 周年、『20 年史』を刊行（2007 年）

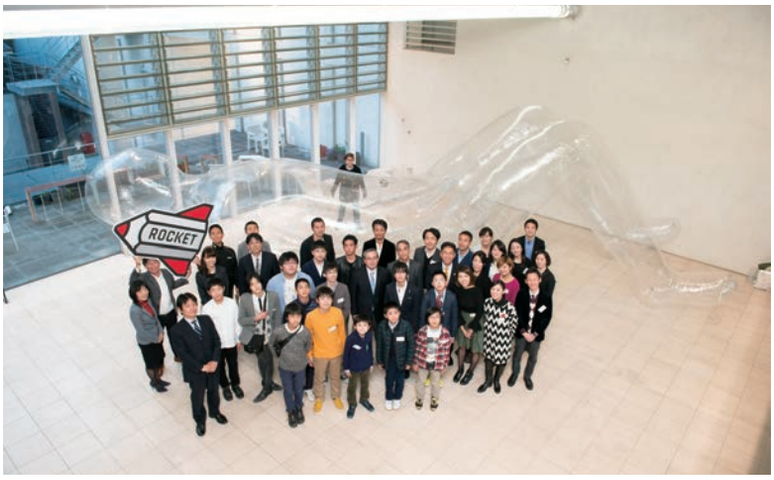
石川県などと連携協定を締結（2012 年）



世界的にも珍しい木製の現役風洞は、2012 年の先端研 25 周年で特別公開された



高橋智隆特任教授らの開発したロボット宇宙飛行士「KIROBO」が国際宇宙ステーションへ（2013 年）



2014 年、突出した能力はあるが、現状の教育環境に馴染めず不登校傾向にある子どもたちを発掘・サポートして、将来の日本をリードしイノベーションをもたらす人材を養成する「異才発掘プロジェクト ROCKET」始動（写真は 2015 年の 2 期生開校式）

さまざまな障がいをもつ学生の高等教育への進学を IT で支援する「DO-IT Japan」は 2016 年には 10 周年を迎えた

「先端研ニュース」の人気連載・異分野研究者の対談が書籍化（2016 年）

2016 年の熊本地震をきっかけに熊本県・熊本大学と連携協定を締結（2017 年）

ケンブリッジ大学クレアホールとの国際連携も深化、2018 年にはプレジデントであるイベットソン教授（右から三人目）が先端研を訪問

先端研クレアホールクラブ発足に先立ち、クレアホールから先端研に送られた木板

キャンパス公開には、2015 年度から、デザイン性の高いポスターが登場（左から 2015 年、2016 年、2017 年）

2017 年キャンパス公開での震災アーカイブプロジェクトディスカッションには熊本県のゆるキャラ「くまもん」が登場

東大先端研

Research Center for
Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

13 号館時計台をモデルに、先端研ロゴを刷新（2017 年）

創立三十周年記念式典を ANA インターコンチネンタルホテル東京にて開催
（写真は元客員教授・堺屋太一氏による基調講演）

創立三十周年記念祝賀会では歴代所長が集合

30 周年記念事業の一環として先端研オリンピックを開催、「ゆるスポ」や「超人スポーツ」など、先端研ならではのスポーツで所内交流が図られた（写真はゾンビサッカー）

30 周年記念事業として、
フォトブックや記念品もつくられた

駒場Ⅱキャンパス全景（2016 年撮影）

発刊の辞

東京大学先端科学技術研究センター所長
神崎亮平

東京大学先端科学技術研究センター（先端研）は、2017 年に設立 30 周年を迎えた。これを機に「30 年史」を編纂し発刊することにした。

先端研は「人と社会に向かう先端科学技術の新領域の開拓」を目指し、「過去を振り返らず、現在と未来を見つめる」という DNA を引継ぎながらも新陳代謝を繰り返し、常に新しい先端研を生んできた。その間、先端研からは破天荒でユニークな研究や研究者が輩出され、研究はもとより組織の創造が繰り返された。

先端研は設立当初より、「学際性」「国際性」「公開性」「流動性」という 4 つの基本理念を掲げ、文系と理系の垣根を越えた領域横断の研究活動（学際性）、国際連携（国際性）、産学官組織連携（公開性）、そして任期を 10 年または 60 歳までとし人材の流動性を高めることで若手人材の雇用効率の拡大を図るなど、現在、まさに大学や社会が直面する課題を 30 年前から意識し、理想の研究組織づくりを教職員が両輪となり実践してきた。

先端研のダイナミックなうごめきは、先端研に多様な研究分野を構築した。理工系・医生物系、そして社会科学からバリアフリーに至る広範な分野を包摂し、現在 43 にのぼる専門分野・部門名を冠した研究室を有した「ミニ東大」ともいわれるユニークな研究体制を整えてきた。個々の分野が突出するだけではなく、異分野が機動的に融合することで、複雑に変容する社会課題に素早く対応できる体制を生み、基礎から応用、社会実装までを着実に踏まえた、東京大学の「研究特区」と認識されるようになった。

常に異分野を意識し、刺激しあい、異なる分野を自在につなげることで「面」が隆起して生まれる点―先端―にこそ、複雑な社会課題を突破する力があると考え、それを実践するための研究環境と体制、人材育成、地域や国際そして産学官の連携を総合的に推進する先端研の研究風土が築かれてきた。

「30 年史」の編纂にあたっては、所内外の大量の資料を収集・整理し、また先端研に深くかかわった方々から直接聞き書きをするなど、地道に丹念にそして精緻に作業を進め、かくも充実した形で編纂をいただいた牧原出教授と佐藤信助教にはこころより深く感謝申し上げたい。

「30 年史」を手にし、常に挑戦者であり続けてきた先端研に身を置くという機会に恵まれたことに感謝するとともに、先端研への熱い思いは増すばかりである。

「30 年史」は、それを通してその時代の“先端研人”の並々ならぬ熱き思い、そして先端研がいかに時代の変化に適応してきたかを伝え、先端研のこれからの存在意義を改めて問う記録になるものである。

編集委員から

20 年史から続く 30 年史

東京大学先端科学技術研究センター 30 年史編集委員
牧原出

先端研 30 年の節目に、20 年目の節目に編纂された『20 年史』の続編を新しく編集するというのは、それなりの苦もあれば楽もありました。20 周年のときは、初めての年史編纂であったため、新情報を発掘し、オーラル・ヒストリーを重ねて全体を見とおすことができました。しかし 30 周年という節目であっても、20 年史＋10 年史としての 30 年史は、30 年を通観した 30 年史とは同じではありません。とはいえ、もし新しく先端研ゼロ年からすべてを見渡すとすれば、40 年史か 50 年史の時点が適切でしょう。そこで、ここでは 20 年史をまずは出発点にそこから 10 年を足しあわせることとしました。所収資料は原則としてこの 10 年間に限定しています。その意味では 20 年史の続編です。

この 10 年は、大学法人化後の 10 年であり、法人化とスーパー COE 終了後の「再建」の 10 年でした。国際的に見れば、東大ひいては日本の大学がグローバル競争にさらされ、2008 年のリーマン金融危機によって世界経済は一気に不安定化しました。国内では 2009 年、2012 年の 2 度の政権交代による高等教育政策の迷走があり、はては東日本大震災によって科学技術への不信感が噴出した時代です。ともすれば疲弊しがちな組織の多いこの時代に、先端研は、再建を通じてふつふつとわきあがる活力を保存してきました。いち早く外部資金の開拓に努め、教授会から経営部門を独立させつつも、20 年間の蓄積を十分踏まえた経営部門が教授会とともに先端研の舵取りを担ってきました。もはや「先端」であることは全国の研究所で当たり前のことですが、他にはない活力溢れる先端研の底力は有り余っているようです。変化の激しいこの 21 世紀に、疲弊なき組織というものが存在すること、その基盤に先端研スタッフのメンタリティがあり、さらには研究所単位で結集する人材があり、先端研が培ってきた連携先の諸機関であることに気づき始めたのが、この 10 年間であったのではないかと思います。先端研が 30 年続いたこと自体が外から見れば驚きでしょうが、中にいれば元気なスタッフばかりの研究所であることがごく自然であり、徐々に体質改善を進めた 30 年の蓄積は当然とも言えます。この意図せずして形成されている「プラットフォーム」をどう「ブレイクスルー」するかが、これからの課題です。この 10 年が次のさらなる発展を用意できた 10 年なのか、曲がり角の 10 年なのかは、この起爆のスケールとタイミングにかかっているでしょう。

もっとも先端研をめぐる環境は厳しさを増しています。東大の法人化前の先端研が全国の附置研究所の「先端」を狙っていたとすれば、法人化後は東大の枠の中での「先端」であることが否応なしに期待されています。大学本部とのパイプ役は基本的には所長が担う時代です。そこでこの間の 4 人の歴代所長のオーラル・ヒストリーをまずは行いました。またそうした環境を乗り越えるためには、20 年を超えて現れ始めた「長老」格の諸先輩の役割が重要であったことも判明してきたため、長老の代表格とこちらで目した岸輝雄先生にもお話をお聞きしました。他にも、この時期の先端研の運営を事務とともに支えた経営戦略企画室については、関係者に記録をとらない形でインタビューを行い、次いで 10 年間の資料を事務の各部門から集め、そこから附属年表の作成作業も進めました。

全体を統括したのは、佐藤信助教です。事務部門との連絡調整、足らざる所の追加調査など見事な働きぶりでした。また基礎データについては、企画室を含めた事務の各部門の多大な協力の賜です。さらに、東大牧原ゼミ学生の俊秀、竹之内彩、細川悠暉、吉富秀平、西崎航貴の 4 名が、本文の原案執筆や年表作成などを手がけてくれました。

こうしてみると、30 年史は文字通り、オール先端研で作成されたものです。流動性の高い研究所の性格のため、一部の情報に欠損が生じていますが、チームプレーのエピソードの一端とご容赦いただけますと幸いです。オーラル・ヒストリーにご協力いただいた歴代所長や関係各位、神崎亮平現所長、中村尚委員長率いる 30 周年事業実行委員会のメンバーの皆様、そして先端研全員に感謝を表したいと思います。